

日本版敗血症診療ガイドライン 2020 (J-SSCG2020) 特別編

COVID-19 薬物療法に関する Rapid/Living recommendations

第三版

日本版敗血症診療ガイドライン 2020 特別委員会
COVID-19 対策タスクフォース

緒言

2019 年末発生した新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) による感染症 COVID-19 は、2020 年初頭より世界中に広がり、今なお収束の兆しが見られない。COVID-19 患者の多くは無症状または軽症で経過するが、高齢者や基礎疾患を持つ感染者を中心に一部重症化し、致死的な経過をとる。その病態は、肺炎を契機とする重症呼吸不全が主であるが、凝固障害・多臓器不全なども呈し、そのメカニズムは十分に解明されていない。

全世界でロックダウンなど感染症制御のために強力な政策が実施され、医療現場においても COVID-19 患者の救命に向けた診療行為が日夜展開されている。社会的インパクトの大きさと緊急性を背景に、種々の薬物療法に関しても日々さまざまな質の臨床エビデンスがプレプリントジャーナルやトップジャーナルに発表されている。この玉石混淆のエビデンスが存在する状況下で、意思決定のために必要な確実性の高いエビデンスを取捨選択するために割くことができる時間は臨床医には限られている。

そこで、日本集中治療医学会、日本救急医学会による 2 学会合同の日本版敗血症診療ガイドライン (J-SSCG) 2020 特別委員会では、GRADE システムに則った J-SSCG 作成の経験を活かし、COVID-19 の薬物療法に特化した特別編を作成し、両学会のホームページで最新情報を提供し、エビデンスに基づいた診療を支援することを目指す。本診療ガイドラインは初版を 2020 年 9 月 9 日に公開した。当該文書は改訂第 3.0 版 (2021 年 1 月 27 日公開) である。

2021 年 1 月 29 日

日本版敗血症診療ガイドライン (J-SSCG2020) 特別委員会
委員長 江木 盛時、小倉 裕司
担当理事 西田 修、田中 裕

**本診療ガイドラインは迅速作成かつオンタイム更新を実施する
Rapid/Living recommendations である (2020 年 12 月 31 日時点)**

常に最新版の情報を利用することを要望する

ver.3.0.0_2021.01.29

Clinical Question／推奨一覧

CQ-1 COVID-19 患者にファビピラビルを投与するか？	
推奨	<ul style="list-style-type: none">● 酸素投与を必要としない軽症患者にファビピラビルの投与を弱く推奨する（弱い推奨／低の確実性のエビデンス：GRADE 2C）● 酸素投与／入院加療を必要とする中等症患者、ならびに人工呼吸器管理／集中治療を必要とする重症患者に対するファビピラビルの投与については、現時点では推奨を提示しない（no recommendation）
CQ-2 COVID-19 患者にレムデシビルを投与するか？	
推奨	<ul style="list-style-type: none">● 酸素投与を必要としない軽症患者に対するレムデシビルの投与については、現時点では推奨を提示しない（no recommendation）● 酸素投与／入院加療を必要とする中等症患者にレムデシビルの投与を弱く推奨する（弱い推奨／中の確実性のエビデンス：GRADE 2B）● 人工呼吸器管理／集中治療を必要とする重症患者にレムデシビルを投与しないことを弱く推奨する（弱い推奨／中の確実性のエビデンス：GRADE 2B）
CQ-3 COVID-19 患者に hidroxicloroquin を投与するか？	
推奨	<ul style="list-style-type: none">● すべての重症度の COVID-19 患者に hidroxicloroquin を投与しないことを強く推奨する（強い推奨／中の確実性のエビデンス：GRADE 1B）
CQ-4-1 COVID-19 患者にステロイドを投与するか？	
推奨	<ul style="list-style-type: none">● 酸素投与を必要としない軽症患者にステロイドを投与しないことを強く推奨する（強い推奨／中の確実性のエビデンス：GRADE 1B）● 酸素投与／入院加療を必要とする中等症患者、ならびに人工呼吸器管理／集中治療を必要とする重症患者にステロイドを投与することを強く推奨する（強い推奨／高の確実性のエビデンス：GRADE 1A）
CQ-4-2 中等症／重症 COVID-19 患者にステロイドパルス療法を行うか？	
推奨	<ul style="list-style-type: none">● 酸素投与／入院加療を必要とする中等症患者、ならびに人工呼吸器管理／集中治療を必要とする重症患者に対するステロイドパルス療法については、現時点では推奨を提示しない（no recommendation）

CQ-5 COVID-19 患者にトシリズマブを投与するか？	
推奨	<ul style="list-style-type: none"> ● 酸素投与を必要としない軽症患者に対するトシリズマブの投与については、現時点では推奨を提示しない（no recommendation） ● 酸素投与／入院加療を必要とする中等症患者にトシリズマブの投与を弱く推奨する（弱い推奨／低の確実性のエビデンス：GRADE 2C） ● 人工呼吸器管理／集中治療を必要とする重症患者に対するトシリズマブの投与については、現時点では推奨を提示しない（no recommendation）

CQ-6 COVID-19 患者にシクレソニドを投与するか？	
推奨	<ul style="list-style-type: none"> ● すべての重症度の COVID-19 患者に対するシクレソニドの投与については、現時点では推奨を提示しない（no recommendation）

CQ-7 COVID-19 患者に抗凝固療法を行うか？	
推奨	<ul style="list-style-type: none"> ● 酸素投与を必要としない軽症患者に対する抗凝固療法については、現時点では推奨を提示しない（no recommendation） ● 酸素投与／入院加療を必要とする中等症患者、ならびに人工呼吸器管理/集中治療を必要とする重症患者に抗凝固療法を行うことを弱く推奨する（弱い推奨／低の確実性のエビデンス：GRADE 2C）

本診療ガイドラインの基本理念と概要

1) 名称

本診療ガイドラインは、日本版敗血症診療ガイドライン 2020 (J-SSCG2020) を補完するものとして作成された。名称を、「COVID-19 薬物療法に関する Rapid/Living recommendations (J-SSCG2020 特別編)」とした。

2) ガイドライン全体の目的

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は、あらゆる年齢層が罹患する重篤な疾患であり、その診療支援を目的とした信頼できる診療ガイドラインを作成することの社会的意義は大きい。さまざまな臨床エビデンスがプレプリントサーバーを中心に賑わすが、質の高い情報の取捨選択に割くことができる時間は臨床医には限られる。本診療ガイドラインは、COVID-19 診療現場における適切な意思決定を支援することを目的とする。

3) 推奨事項適用の対象患者集団

成人 COVID-19 患者を対象とする。医療機関外 (自宅、ホテルなど) で療養加療中の軽症患者、酸素投与あるいは入院加療を必要とする中等症患者、ならびに集中治療管理を必要とする重症患者、のすべてを対象とする。

4) 本診療ガイドラインの使用者

COVID-19 診療に従事または関与する医師、看護師、薬剤師、理学療法士、臨床工学技士、薬剤師、管理栄養士などの全ての医療従事者とする。

5) 利用にあたっての注意

✓ Living recommendations であること

COVID-19 に関連するエビデンスは時々刻々変化している。本診療ガイドラインは、Living systematic review に基づき、迅速性を重んじたアップデートを随時行う。本診療ガイドラインの利用に際しては、常に最新版の推奨を参考とされることを強く望む。本 ver3.0.0 は 2020 年 12 月 31 日時点で得られたエビデンスを元に作成している。

✓ 現場裁量を制限するものではないこと

診療ガイドライン作成とその使用が目指すのは、患者全体における治療成績の向上である。したがって、個別の患者の状況や価値観・意向を考慮して、診療ガイドラインを必ずしも遵守しない治療方法が医師の裁量によって選択される場合もあることに留意願いたい。また診療ガイドラインにおいて提示する推奨は決して法律 (勧告や命令) ではなく、その領域の専門家が標準より優れた治療成績を達成しているのであれば、本診療ガイドラインの遵守は必要ない場合もあるだろう。本委員会は、本診療ガイドライン

を裁判における根拠、あるいは保険適応の是非の根拠として利用することを認めない。

✓ 薬物療法以外の診療について

本診療ガイドラインは薬物療法に限定して推奨を提示するものである。COVID-19 診療においては、薬物療法以外にも、呼吸管理、凝固管理、併存する感染症管理、精神的ケアなど、多くの留意点が存在するが、それらは本診療ガイドラインの対象外である。

6) 本ガイドライン作成における組織編成

P34,35「組織構成」に記載の通り

7) 関係する専門家グループの代表者の参加と専門家による外部評価

本診療ガイドラインは J-SSCG2020 作成委員会内でタスクフォースを選定した。タスクフォースメンバーはすべて敗血症診療・COVID-19 診療に精通する医師である。本診療ガイドラインで採用した GRADE アプローチに関する専門家として、コアワーキングメンバー1名（相原委員）を委嘱した。

8) 対象集団（患者、一般市民など）の価値観や意向を反映するための工夫

COVID-19 罹患経験者は限られており患者の価値観や意向に関する質的研究は実施しなかった。

9) 診療ガイドライン作成の透明性

監査委員を定め、各種作業工程の内部査読をリアルタイムで行った。経済的 COI/学術的 COI を付録 P110-114「COI 一覧」に開示した。経済的 COI は、日本医学会診療ガイドライン策定参加資格基準ガイダンスに従い、2017 年から 3 年間分に適用して開示した。

10) 作成資金

本診療ガイドラインは、日本集中治療医学会と日本救急医学会の資金で作成した。作成にあたり、すべてのメンバーは一切の報酬を受けていない。

11) 本診療ガイドライン普及の方策

本診療ガイドラインは日本集中治療医学会と日本救急医学会のホームページ上で無償公開する。迅速性を重んじるため随時更新し、両学会のメーリングリストで周知する。

12) 改訂予定

エビデンスの改変や追加に応じて随時更新を行う。更新を続ける期間は COVID-19 流行期が収束するまでとし、更新終了の判断は両学会の理事会において行う。

CQ1 COVID-19 患者にファビピラビルを投与するか？

推奨

- ✓ 酸素投与を必要としない軽症患者にファビピラビルの投与を弱く推奨する（弱い推奨／低の確実性のエビデンス：GRADE 2C）
- ✓ 酸素投与／入院加療を必要とする中等症患者、ならびに人工呼吸器管理／集中治療を必要とする重症患者に対するファビピラビルの投与については、現時点では推奨を提示しない（no recommendation）

更新日：2021年1月29日

1. 背景

ファビピラビル（アビガン®）は、新型又は再興型インフルエンザウイルス感染症に対し2014年3月に承認を受けた抗ウイルス薬である。生体内で変換された三リン酸化体がRNAポリメラーゼを選択的に阻害することでRNAウイルスに対する効果が期待される。流行初期より compassionate use として薬剤提供がなされ、複数のRCTが実施されてきた。COVID-19 に対して効果が期待される薬剤ではあるがその有効性は定まっておらず、CQ立案に際し臨床的意義が大きいと考えられる。

【ファビピラビル投与方法】

初日 1800mg×2回、2日目以降 800mg×2回/日、10日間投与（最長14日間）

2. この推奨の理論的根拠

●利益と害のバランス

5RCT 579 症例において、7-11日時点の臨床症状改善について点推定値では中程度の効果が見込まれる（1000人当たり129人の増加）。重篤有害事象は悪化しない可能性が高いが、従来指摘される催奇形性は留意すべきである。RCTの対象患者が主として軽症であったため、死亡アウトカムの評価は不十分である。

以上より、利益と害のバランスは軽症患者に対してはファビピラビル投与の利益が勝ると判断した。一方で、中等症・重症患者に対しては、ファビピラビルの利益と害のバランスは判断不能であった。

●エビデンスの確実性

臨床症状改善、全原因死亡、重篤有害事象のアウトカムにおいてエビデンスの確実性は、「中」あるいは「低」と判断した。（付録エビデンスプロファイル参照）。その方向性を加味し、全体的なエビデンスの確実性は軽症患者に対しては「低」、中等症・重症患者に対しては「採用研究なし」と判断した。

●価値観と意向

主要なアウトカムについて、患者・家族の価値観に重要な不確実性またはばらつきはないと考える。

●コストや資源利用

2021年1月現在、アビガン®は厚生労働省管理のもと医療機関に提供されている（資源が限られている）。コスト面では、COVID-19治療薬として原則全額公費負担となる。使用方法に関する詳細は、厚労省事務連絡「新型コロナウイルス感染症に対するファビピラビルに係る観察研究の概要及び同研究に使用するための医薬品の提供に関する周知依頼について」を参照のこと

(<https://www.mhlw.go.jp/content/000659872.pdf>)

●その他、（許容可能性、実行可能性）

医療機関内の医薬品の適応外使用に係る手続き、観察研究への参加、患者同意（代諾者含む）のもと使用することが求められる（付録 EtD テーブル参照）。

3. パネルの合意の程度

修正 Delphi 法（Rand/UCLA）による投票の結果、中央値 8 点、不一致指数 0.000 で本推奨の合意に至った（第三版による再投票の結果）。

4. 進行中のエビデンス

コクランフランスの Living mapping によると、2021年1月13日現在、50件のファビピラビルを対象とした RCT が進行中である。富士フイルム富山化学株式会社が主導する RCT（JapicCTI-205238）は既に症例集積は完了しているが、現時点で論文化されていないため今回のシステマティックレビューには含まれていない。

藤田医科大学病院主導 RCT（jRCTs041190120）は、そのデザインから今回の対象 RCT からは除外となった（詳細は付録に記載）。

5. 第三版におけるアップデートの内容

第二版以降、複数の RCT が報告された。そのため、第三版では対照群に他の抗ウイルス薬を使用したものは除外することとし、5RCT が対象となった。推奨内容には変更なし。

6. 参考文献

採用した 5RCT の引用情報は付録『各 CQ で採用となった研究一覧』に記載。

CQ2 COVID-19 患者にレムデシビルを投与するか？

推奨

- ✓ 酸素投与を必要としない軽症患者に対するレムデシビルの投与については、現時点では推奨を提示しない（no recommendation）
- ✓ 酸素投与／入院加療を必要とする中等症患者にレムデシビルの投与を弱く推奨する（弱い推奨／中の確実性のエビデンス：GRADE 2B）
- ✓ 人工呼吸器管理／集中治療を必要とする重症患者にレムデシビルを投与しないことを弱く推奨する（弱い推奨／中の確実性のエビデンス：GRADE 2B）

更新日：2021年1月29日

1. 背景

エボラ出血熱、マールブルグウイルス感染症の治療薬として開発されたレムデシビル（ベクルリー®）は、その後、MERS、SARS、SARS-CoV-2をはじめとする一本鎖RNAウイルスに対する抗ウイルス活性が示された。RNAウイルスの自己複製に必須とされるRNA dependent RNA polymeraseを治療標的とする薬剤である。

本邦では「特例承認制度」により2020年5月7日に新型コロナウイルス感染症への治療薬として承認された。2020年10月22日、アメリカ合衆国でも正式に承認された。以上より、CQ立案に際し臨床的意義が大きいと考えられる。

【レムデシビル投与方法】

成人及び体重40kg以上の小児には、レムデシビルとして投与初日に200 mgを、投与2日目以降は100 mgを1日1回点滴静注する。総投与期間は10日まで。

2. この推奨の理論的根拠

●利益と害のバランス

採用エビデンスは4件(Beigel 2020, Wang 2020, Spinner 2020, Pan 2020)であった。軽症において全原因死亡における効果は分からない（1000人当たり3人の減少）。中等症において全原因死亡（1000人当たり22人の減少）・臨床症状改善（1000人当たり68人の増加）について、小さい効果が見込まれる。重症において全原因死亡（1000人当たり62人の増加）・臨床症状改善（1000人当たり20人の減少）について、効果が見込まれない。中等症と重症において重篤な有害事象発生割合は増加しない（1000人当たり61人の減少）。

軽症については効果推定値の範囲が広く、判断不能であり、中等症に対してはレムデシビル投与による利益が上回ると判断した。一方、重症患者に対してはレムデシビル投与による害が上回ると判断した。

●エビデンスの確実性

各アウトカムに関するエビデンスの確実性は、「低」から「中」である。重症度に応じた解析を行い、軽症では「低」、中等症では「中」、重症では「中」と判断した。（付録エビデンスプロファイル参照）

●価値観と意向

主要なアウトカムについて、患者・家族の価値観に重要な不確実性またはばらつきはないと考える。

●コストや資源利用

2021年1月現在、ベクルリー®は薬事承認（2020年5月7日特例承認）されているが、厚生労働省管理のもと対象を規定して医療機関に提供されている（資源が限られている）。コスト面では、COVID-19治療薬として原則全額公費負担となる。（使用方法に関する詳細は厚労省 COVID-19 診療の手引きを参照のこと）

●その他、（許容可能性、実行可能性）

2020年11月20日、WHOより条件付き非推奨の勧告がなされたが、重症度分類はなされていない。中等症と重症で推奨の方向性が異なるが、両者を厳密に区別することは困難である。エビデンスの集積により推奨が変更になる可能性もある。

3. パネルの合意の程度

修正 Delphi 法（Rand/UCLA）による投票の結果、中央値 8 点、不一致指数 0.00 で本推奨の合意に至った。（第三版における再投票の結果）。

4. 進行中のエビデンス

コクランフランスの Living mapping によると、2021年1月13日現在、34件のレムデシビルを対象の研究が進行中である。レムデシビル vs プラセボあるいは標準治療の比較研究は13件、レムデシビル以外の COVID-19 薬剤との比較は21件進行中である。国立国際医療研究センター主導臨床試験が進行中である（JPRN-jRCT2031190264）。

5. 第三版におけるアップデートの内容

追加論文はなく、推奨変更はない。方法論の統一により一部記載が変更された。

6. 参考文献

採用した 4RCT の引用情報は付録『各 CQ で採用となった研究一覧』に記載。

CQ3 COVID-19 患者に hidroキシクロロキンを投与するか？

推奨

- ✓ すべての重症度の COVID-19 患者に hidroキシクロロキンを投与しないことを強く推奨する（強い推奨／中の確実性のエビデンス：GRADE 1B）

更新日：2021年1月29日

1. 背景

hidroキシクロロキン（プラケニル®）はマラリアの治療薬で、免疫調節作用を有するため自己免疫疾患の治療にも使用されてきた。日本国内では全身性エリテマトーデスなどに対して2015年7月より製造販売が承認された。近年、SARSやMERSを引き起こすコロナウイルスに対しても抗ウイルス作用があることが知られるようになった。SARS-CoV-2に対する *in vitro* 活性を有することがわかり COVID-19 に対して効果が期待される薬物として米国で主に使用されるようになったがその有効性は定まっておらず、CQ 立案に際し臨床的意義が大きいと判断した。

【hidroキシクロロキン投与方法】

投与量 400～800mg/日を5～21日間投与（ローディングする場合もある）

2. この推奨の理論的根拠

●利益と害のバランス

15RCT 9771 症例において、28日時点の全原因死亡に対する絶対効果は点推定値で1000人当たり13人の増加が見込まれた。また、6RCT 6135 症例において、28日時点の臨床症状改善は、1000人当たり6人の増加が見込まれた。一方、13RCT 7023 症例において、28日時点の重篤な有害事象の発生の増加は見込まれなかった（1000人当たり0人多い）。死亡アウトカムに置く相対的価値観を他のアウトカムの1-5倍の間で変動させた場合、有害効果の正味の効果推定値は1000人当たり7人の増加から59人の増加となったが、いずれの場合においても点推定値はhidroキシクロロキンの害を示すものである。よってhidroキシクロロキン投与の害が勝ると判断した。

●エビデンスの確実性

全原因死亡、臨床症状改善、重篤有害事象のアウトカムに関するエビデンスの確実性は、それぞれ「高」、「高」、「非常に低」と判断した。全てのアウトカムにわたる正味の効果推定値（Net Effect Estimate）の不精確さを考慮し、最終的に全体のエビデンスの確実性を「中」とした。

●価値観と意向

主要なアウトカムについて、患者・家族の価値観に重要な不確実性またはばらつきはないと考える。

●コストや資源利用

2021年1月現在、 hidroxicloroquin は全身性エリテマトーデスなどに対する治療薬として本邦で承認されている。COVID-19 に対しては適応外使用となる。

●その他、（許容可能性、実行可能性）

医療機関内の医薬品の適応外使用に係る手続きと患者同意（代諾者含む）のもと使用することが求められる。（付録 EtD テーブル参照）

3. パネルの合意の程度

修正 Delphi 法（Rand/UCLA）による投票の結果、中央値 8 点、不一致指数 0.292 で本推奨の合意に至った（第三版における再投票の結果）。

4. 進行中のエビデンス

コクランフランスの Living mapping によると、2021年1月1日現在、COVID-19 患者に対する hidroxicloroquin とプラセボもしくは標準治療を比較した RCT のうち、未報告なものが 72 件ある。しかし、これまでの RCT で否定的な結果が続いたことが影響したためか、ここ数ヶ月進行が認められない研究が多数ある。ガイドライン ver2.2 でも取り上げたブラジルの Catolica university が中心となって hidroxicloroquin、ロピナビル+リトナビル、プラセボの投与を比較した 1968 症例を対象とした大規模 RCT（NCT04403100）も症例集積が終了し数ヶ月経過しているが、未だに報告はない。

5. 第三版におけるアップデートの内容

Abd-Elsalam 2020、Dubee 2020、Lyngbakken 2020、Omrani 2020、Pan 2020、Self 2020、Ulrich 2020、Welsley 2020 論文の 7RCT が追加となった。推奨度、エビデンスの確実性については特に変更はなかった。

6. 参考文献

採用した 16RCT の引用情報は付録『各 CQ で採用となった研究一覧』に記載。

CQ4-1 COVID-19 患者にステロイドを投与するか？

推奨

- ✓ 酸素投与を必要としない軽症患者にステロイドを投与しないことを強く推奨する（強い推奨／中の確実性のエビデンス：GRADE 1B）
- ✓ 酸素投与／入院加療を必要とする中等症患者、ならびに人工呼吸器管理／集中治療を必要とする重症患者にステロイドを投与することを強く推奨する（強い推奨／高の確実性のエビデンス：GRADE 1A）

注1：現時点では COVID-19 患者に対して用いる最適なステロイドの種類ならびに投与量を決断するための直接比較研究はない

注2：ステロイドパルス療法は含まない

更新日：2021年1月29日

1. 背景

ステロイドは様々な種類が存在するが、さまざまな疾患に対して適応を持ち、古くから販売されている。COVID-19 が重症化する機序は、過去に流行したウイルス性肺炎（H5N1 インフルエンザ、SARS、H1N1 インフルエンザなど）のように、宿主において免疫応答が過剰に発生することで臓器障害が起きることであると推測されている。ステロイドはその免疫応答を緩和する作用が期待されている。したがって、CQ 立案に際し臨床的意義が大きいと考えられる。

【ステロイド投与方法】 ※以下のいずれかの投与方法を推奨する

- ・デキサメサゾン（6mg 経口あるいは静注、1日1回）
- ・メチルプレドニゾン（40mg 静注、12時間ごと）
- ・ヒドロコルチゾン（200mg 静注、1日1回あるいは持続投与）

2. この推奨の理論的根拠

●利益と害のバランス

軽症群では 1RCT 1535 症例が採用され、全原因死亡では効果は見込まれなかった。臨床症状改善、重篤有害事象は利用できるデータはなかった。中等症群では 3RCT 4228 症例が採用され、全原因死亡ではわずかな効果が見込まれた（1000 人あたり 28 人減少）。臨床症状改善は利用できるデータがなく、重篤有害事象は発生なしであった。重症群では 5RCT 1967 例が採用され、全原因死亡、臨床症状改善では大きい効果が見込まれた（1000 人あたり 284 人減少）。重篤有害事象はわずかであった。

したがって、利益・害のバランスについては中等症／重症患者に対しては利益が勝る、軽症患者では害が上回ると判断した。

●エビデンスの確実性

軽症群／中等症で採用したアウトカムは一点のみでは全体的なエビデンスの確実性はそれぞれ軽症群で「中」、中等症で「高」とした。重症群では「高」とした。
(付録エビデンスプロファイル参照)

●価値観と意向

全原因死亡について、患者・家族の価値観に重要な不確実性またはばらつきはないと考える。

●コストや資源利用

デキサメサゾン、メチルプレドニゾロン、ヒドロコルチゾンは本邦においては、薬事承認されている。コストも安価で、投与に必要な設備/人的負担も問題ない。

●その他、(許容可能性、実行可能性)

許容可能性や実行可能性に問題はないと考える。(付録 EtD テーブル参照)

3. パネルの合意の程度

修正 Delphi 法 (Rand/UCLA) による投票の結果、中央値 8 点、不一致指数 0.13 で本推奨の合意に至った (第三版における再投票の結果)。

4. 進行中のエビデンス

コクランフランス主導の Living mapping によると、2020 年 12 月 31 日現在、ステロイドに関する主に中等症／重症を対象とした 37 件の RCT (プレドニゾロン 3 件、メチルプレドニゾロン 20 件、デキサメサゾン 12 件、プレドニゾン 2 件) が進行中である。

5. 第三版におけるアップデートの内容

第二版より追加した RCT はない。推奨内容にも変更はない。方法論の統一による表記修正、一部数値の誤記の訂正を行った。

6. 参考文献

採用した 6RCT の引用情報は付録『各 CQ で採用となった研究一覧』に記載。

CQ4-2 中等症／重症 COVID-19 患者にステロイドパルス療法を行うか？

推奨

- ✓ 酸素投与／入院加療を必要とする中等症患者、ならびに人工呼吸器管理／集中治療を必要とする重症患者に対するステロイドパルス療法については、現時点では推奨を提示しない（no recommendation）

更新日：2021年1月29日

1. 背景

COVID-19 が重症化する機序は、過去に流行したウイルス性肺炎（H5N1 インフルエンザ、SARS、H1N1 インフルエンザなど）のように、宿主において免疫応答が過剰に発生することで臓器障害が起きることであると推測されている。ステロイドはその免疫応答を緩和する作用が期待されている。

ステロイドパルス療法は、高用量のステロイドを投与する SARS などのウイルス性肺炎や ARDS など極めて重症である呼吸不全患者において効果が検討されてきた治療法である。その他のステロイド療法とは一線を画す治療法であり、新たに重症よりの患者を想定した CQ を立案した。

【実施方法】

メチルプレドニゾロン（250mg 静注、24 時間ごと、3 日間）が採用された RCT では行われているが、本邦ではメチルプレドニゾロン（1000mg 静注、24 時間ごと、3 日間）が一般的である。

2. この推奨の理論的根拠

●利益と害のバランス

入院患者対象の 1RCT を採用した。この RCT は、対象患者は集中治療室に入室しているものの人工呼吸器管理を受けておらず、本ガイドラインの分類においては中等症に該当すると判断した。ただし、約 75% が高流量あるいは高濃度酸素療法を受けており中等症の中でもより重症群を対象としていた。

62 症例が採用され、退院時点の全原因死亡で大きい効果が見込まれた（1000 人あたり 369 人の減少）。臨床症状改善は利用できるデータがなく、重篤有害事象はわずかな効果（1000 人あたり 13 人の減少）が見込まれた。

しかし、採用された RCT の質は低く、ステロイドの投与量も本邦における一般的な投与量と差異があり、全体的なエビデンスの確実性も非常に低いため効果のバランスについては不明であると判断した。

●エビデンスの確実性

各アウトカムに関するエビデンスの確実性は、「非常に低」であった。よって全体的なエビデンスの確実性を「非常に低」とした。（付録エビデンスプロファイル参照）

●価値観と意向

主要なアウトカムについて、患者・家族の価値観に重要な不確実性またはばらつきはないと考える。

●コストや資源利用

メチルプレドニゾロンは本邦においては、薬事承認されている。コストも安価で、投与に必要な設備/人的負担も問題ない。

●その他、（許容可能性、実行可能性）

許容可能性や実行可能性に問題はないと考える（付録 EtD テーブル参照）。ただし、ウイルス性肺炎そのものに対しては保険適応外である。

3. パネルの合意の程度

修正 Delphi 法（Rand/UCLA）による投票の結果、中央値 8 点、不一致指数 0.13 で本推奨の合意に至った（第三版における投票の結果）。

4. 進行中のエビデンス

コクランフランスの Living mapping によると、2020 年 12 月 31 日現在、ステロイドパルス療法の効果を検討した RCT は進行していない。

5. 第三版におけるアップデートの内容

CQ 4-2 として新たに追加された CQ である。Edalatifard 2020 の 1RCT を採用した。

6. 参考文献

採用した 1RCT の引用情報は付録『各 CQ で採用となった研究一覧』に記載。

CQ5 COVID-19 患者にトシリズマブを投与するか？

推奨

- ✓ 酸素投与を必要としない軽症患者に対するトシリズマブの投与については、現時点では推奨を提示しない（no recommendation）
- ✓ 酸素投与／入院加療を必要とする中等症患者にトシリズマブの投与を弱く推奨する（弱い推奨／低の確実性のエビデンス：GRADE 2C）
- ✓ 人工呼吸器管理／集中治療を必要とする重症患者に対するトシリズマブの投与については、現時点では推奨を提示しない（no recommendation）

更新日：2021年1月29日

1. 背景

COVID-19 患者において、インターロイキン6（IL-6）を含む炎症性サイトカインの産生が増加し、疾患進行と関連することが報告されている。IL-6 受容体拮抗薬であるトシリズマブ（アクテムラ®）は、COVID-19 患者における炎症性サイトカインの作用を抑制し予後を改善する可能性がある薬剤として期待され、数多くの臨床研究が行われているが、有効性は定まっていない。COVID-19 治療薬の候補として臨床的意義が大きいと考えられ、本 CQ を立案した。

【トシリズマブ投与方法】

トシリズマブ 4～8mg/kg 静脈内投与（最大量 800mg）で、原則として単回投与（症状悪化/改善に乏しい場合に 8～48 時間後の追加投与を行う研究もある）

2. この推奨の理論的根拠

●利益と害のバランス

重症/中等症の入院患者対象の 6RCT、1376 症例において、中等症群に対するトシリズマブは、28 日時点の全原因死亡について 1000 人当たり 5 人の増加、臨床症状改善について 1000 人当たり 54 人の増加が見込まれる。重篤な有害事象の発生は増加しない（1000 人当たり 28 人の減少）。重症群に対し、28 日時点の全原因死亡について 1000 人当たり 20 人の増加、臨床症状改善について 1000 人当たり 32 人の増加が見込まれる。重篤な有害事象の発生は増加しない（1000 人当たり 35 人の減少）。

以上より、中等症患者に対してはトシリズマブ投与による利益が上回ると判断した。重症患者では死亡アウトカムの重み付けにより利益と害のバランスが変動するため、不確実性の大きさから推奨作成を保留した。軽症患者に対してはトシリズマブの利益と害のバランスは判断不能であった。

●エビデンスの確実性

各アウトカムに関するエビデンスの確実性は、中等症患者において「低」あるいは「中」、重症患者において「非常に低」あるいは「低」であった。その方向性を加味し、全体的なエビデンスの確実性は中等症患者に対しては「低」、重症患者に対しては「非常に低」と判断した（付録エビデンスプロファイル参照）。

●価値観と意向

主要なアウトカムについて、患者・家族の価値観に重要な不確実性またはばらつきはないと考える。

●コストや資源利用

2021年1月現在、トシリズマブは関節リウマチや成人ステル病などに対する治療薬として本邦で承認されている。コスト面では、COVID-19に対する治療は原則公費負担となる。現在、国内において企業治験が実施されている。

●その他、（許容可能性、実行可能性）

医療機関内の医薬品の適応外使用に係る手続きと患者同意（代諾者含む）のもと使用することが求められる（付録 EtD テーブル参照）。

3. パネルの合意の程度

修正 Delphi 法（Rand/UCLA）による投票の結果、中央値 8 点、不一致指数 0.132 で本推奨の合意に至った（第三版における再投票の結果）。

4. 進行中のエビデンス

コクランフランスの Living mapping によると、2021年1月11日現在、55件のトシリズマブを対象とした RCT が進行中である。その多くが中等症/重症患者に対する研究である。本邦では、中外製薬による重症 COVID-19 肺炎を対象とした第Ⅲ相臨床試験が行われている（JapicCTI-205270）。

5. 第三版におけるアップデートの内容

1 件の RCT（Salama 2020）が追加となった。推奨内容には変更なし。

6. 参考文献

採用した 6RCT の引用情報は付録『各 CQ で採用となった研究一覧』に記載。

CQ6 COVID-19 患者にシクレソニドを投与するか？

推奨

- ✓ すべての重症度の COVID-19 患者に対するシクレソニドの投与については、現時点では推奨を提示しない (no recommendation)

注：現時点では COVID-19 患者に対してシクレソニドを投与すべきか決断するための質の高いエビデンスがない

更新日：2021 年 1 月 29 日

1. 背景

シクレソニド（オルベスコ®）は、気管支喘息に対する治療薬として世界中で使用されている吸入ステロイド薬である。COVID-19 の流行当初、同薬の有効性が報道されたことにより、本邦では COVID-19 に対して広く使用されている薬剤の一つである。しかしながら、同薬は諸外国では治療薬として頻用されておらず、その有効性については議論が分かれている。そのため、同薬を COVID-19 治療薬として使用すべきかどうかについては臨床的意義が大きいと考えられ、本 CQ を立案した。

【シクレソニド投与方法】

シクレソニド 1 回 200~400 μ g 吸入を 1 日 1~3 回投与で行われる。（気管支喘息に対する使用では、1 日最大投与量は 800 μ g までとされている。）

2. この推奨の理論的根拠

●正当性

2020 年 12 月 31 日の時点で結果が正式に公開されているシクレソニド関連の RCT は、主要 Living SR/Guideline では見られなかった。同様に、非ランダム化研究の収載も見られなかった。このため、本 CQ では、PubMed と CENTRAL などでの独自の検索を追加で行った（検索式は付録を参照）。その結果、シクレソニドの有益性を示唆する 1 件の観察研究が抽出されたが、交絡因子の調整がなされていないなどバイアスリスクが高く、またサンプルサイズも非常に小さい (n=23) ため、研究の質の観点から本解析の対象とはしなかった。以上の状況より、現時点では明確な推奨の提示は不可能であると判断した。

一方、本邦で無症状・軽症患者を対象とした RCT として、RACCO Study (jRCTs031190269) の結果の一部がプレスリリースされ、シクレソニドの有益性を否定する結果（シクレソニド群で、画像上の肺炎の増悪が有意に多い[シクレソニド群 41 例中 16 例、対症療法群 48 例中 9 例、リスク比 2.08、90%信頼区間 1.15~3.75]）であることには留意する必要があると考えられる。

●価値観と意向

主要なアウトカムについて、患者・家族の価値観に重要な不確実性またはばらつきはないと考えられる。

●コストや資源利用

2021年1月現在、COVID-19における入院治療は公費負担となるため、患者にとって経済的に容易である。また、外来治療の場合でも、オルベスコ®は200µgキットで約2000円であり、高額な治療には分類されないと考えられる。

●その他、（許容可能性、実行可能性）

医療機関内の医薬品の適応外使用に係る手続きと患者同意（代諾者含む）のもとで使用することが求められる。また、実行可能性については、気管挿管されていない患者であれば技術的に容易である。

3. パネルの合意の程度

修正 Delphi 法（Rand/UCLA）による投票の結果、中央値 9.0 点、不一致指数 0.1316 で本推奨の合意に至った（第三版における投票の結果）。

4. 進行中のエビデンス

コクランフランスの Living mapping によると、2020年12月31日現在、本邦で行われている RACCO Study を含めて現在 7 件の RCT が進行中である。RACCO Study については、すでに結果の一部がプレスリリースされており、その他 2 件の RCT が 2020年12月をもって試験終了となる予定であり、正式な解析結果の発表が待たれる。

5. 第三版におけるアップデートの内容

本 CQ は第三版から新規に採択された。

6. 参考文献

抽出された観察研究の引用情報は付録『各 CQ で採用となった研究一覧』に記載。

CQ7 COVID-19 患者に抗凝固療法を行うか？

推奨

- ✓ 酸素投与を必要としない軽症患者に対する抗凝固療法については、現時点では推奨を提示しない（no recommendation）
- ✓ 酸素投与／入院加療を必要とする中等症患者、ならびに人工呼吸器管理/集中治療を必要とする重症患者に抗凝固療法を行うことを弱く推奨する（弱い推奨／低の確実性のエビデンス：GRADE 2C）

注：現時点では COVID-19 患者に対して用いる最適な抗凝固薬の種類ならびに投与量を決断するための十分なエビデンスはない。また、重症患者のみを対象とした研究が少なく、中等症と重症を区別した推奨はできない。

更新日：2021 年 1 月 29 日

1. 背景

COVID-19 はウイルス感染に伴う血管障害による凝固異常が病態の 1 つとして考えられている。COVID-19 の死因の 1 つに肺塞栓症が挙げられ、その血栓形成を予防することが患者予後改善につながることを期待されている。抗凝固療法には予防投与量と治療投与量の 2 つの投与方法があり、投与量も含めて抗凝固療法自体の有効性を検討する臨床的意義が大きいと考えられ、本 CQ を立案した。

【抗凝固療法投与方法】

- ① 予防投与量（下記もしくはそれに準ずる量と種類）
 - ・ エノキサパリン 1 回 30-40 mg 1 日 1-2 回（もしくは 1mg/kg 1 日 1 回）
 - ・ 未分画ヘパリン 1 回 5000-7500 単位 1 日 3 回 皮下注
 - ・ アピキサバン 1 回 2.5 mg 1 日 2 回
 - ・ フォンダパリヌクス 1 回 2.5mg 1 日 1 回
- ② 治療投与量（下記もしくはそれに準ずる量と種類）
 - ・ ヘパリン/アルガトロバン 静注
 - ・ エノキサパリン 1 回 1 mg/kg 1 日 2 回もしくは 1 回 1.5 mg/kg 1 日 1 回
 - ・ アピキサバン 1 回 5mg 1 日 2 回
 - ・ フォンダパリヌクス 1 回 5-10mg 1 日 1 回

2. この推奨の理論的根拠

●利益と害のバランス

中等症及び重症患者に対する抗凝固療法は退院時の全原因死亡について予防投与量／治療投与量で中程度の効果が見込まれる（予防投与量；1000 人当たり 116 人

の減少、治療投与量：1000人当たり107人の減少）。静脈血栓塞栓症（VTE）については予防投与量の効果は見込まれない（1000人当たり69人の減少）。VTEの治療投与量の効果は不明である。重篤な出血の発生は、予防投与量（1000人当たり20人の減少）と治療投与量（1000人当たり7人の増加）で増加しない

以上より、中等症及び重症患者に対しては抗凝固療法による利益が上回ると判断した。軽症患者に対しては抗凝固療法のエビデンスがなく判断不能であった。

●エビデンスの確実性

全原因死亡、VTE、重篤な出血の各アウトカムにおいて、エビデンスの確実性は予防投与量及び治療投与量ともに「低」であった。よって、全体的なエビデンスの確実性は「低」と判断した（付録エビデンスプロファイル参照）。

●価値観と意向

主要なアウトカムについて、患者・家族の価値観に重要な不確実性またはばらつきはないと考える。

●コストや資源利用

ヘパリンは抗凝固療法で広く使用され、コストも安価である。

●その他、（許容可能性、実行可能性）

抗凝固療法は敗血症や急性呼吸窮迫症候群などその他の重症病態に対するVTE予防および治療として広く受け入れられている投与方法である。

3. パネルの合意の程度

修正 Delphi 法（Rand/UCLA）による投票の結果、中央値 8 点、不一致指数 0.0822 で本推奨の合意に至った（第三版における投票の結果）。

4. 進行中のエビデンス

コクランフランスの Living mapping によると、2020 年 12 月 31 日現在、101 件の抗凝固療法を対象とした RCT が進行中である。

5. 第三版におけるアップデートの内容

本 CQ は第三版から新規に採択された。

6. 参考文献

採用した観察研究の引用情報は付録『各 CQ で採用となった研究一覧』に記載。

本診療ガイドラインの作成方法

COVID-19 薬物療法に関する Rapid/Living recommendations の作成にあたり、GIN-McMaster ガイドライン作成チェックリスト拡張版（extension of the Guideline Development Checklist for rapid guidelines）[1]に則って作業を進め、エビデンスの確実性や推奨の強さの決定には GRADE アプローチを採用した。①スコープと CQ の立案、②PICOT（Patient, Intervention, Comparison, Outcome, Time）の設定、③既存のリビングシステマティックレビューまたはリビングガイドラインの採用（adoption）、適用（adaptation）、または新規作成（de novo creation）による GRADE Adolopment [2]、④エビデンス総体の確実性の評価、⑤推奨事項の策定と合意形成、の 5 つの基本工程を経て作成した。

推奨作成の基本工程

①スコープと CQ の立案

現在の日本の COVID-19 診療の実情に合わせ、臨床現場で利用可能な薬物療法のなかで臨床的重要度が高い薬剤を CQ として選定した。選定にあたってはタスクフォースメンバーの合議により決定した。合意基準は、全参加メンバーの 2/3 以上の合意とし、不一致の程度は Rand/UCLA 法[3]を使って評価した。

②推奨作成のための PICOT の設定

②-1：対象患者集団

成人 COVID-19 患者を対象とする。医療機関外（自宅、ホテルなど）で療養加療中の軽症患者、酸素投与あるいは入院加療を必要とする中等症患者、ならびに集中治療管理を必要とする重症患者、のすべてを対象とする。原則として重症度別に推奨作成を行い、必要な場合は、CQ によってはそれぞれ対象サブグループごとに推奨を提示する。

成人 COVID-19 の重症度分類は、厚生労働省「新型コロナウイルス感染症 COVID-19 診療の手引き」を参考に表 1 のように定義した[4]。

②-2：介入治療

統括委員、タスクフォースの合議ならびに投票により、その時点でのエビデンス収集具合や社会的情勢を加味し、適宜対象薬剤を選出していく。CQ によっては、投与量や用法ごとでの推奨を提示する。

②-3：比較対照

原則として、本診療ガイドラインにおける比較は、関心のある介入治療 vs 標準治療（もしくは通常ケア、プラセボ治療）とした。今後の状況によっては、多重比較（ネットワークメタアナリシス）も検討したい。

②-4：アウトカム

COVID-19 治療においては、COS-COVID が提案されているが[5]、本診療ガイドラインにおいては、患者にとって重大なアウトカムとして、全原因死亡、臨床症状改善、重篤有害事象の3個を設定した。これらの3つのアウトカムについて、利益と害のバランスや、エビデンスの確実性を評価した。

当初設定していた重症化率のアウトカムは、複合アウトカムの項目に死亡を含んでいること（すでに採用している死亡アウトカムとの競合が生じる）、また各論文間でのアウトカム定義が不均一であること、といった理由により本診療ガイドラインにおいては採用保留とした。

②-5：時間枠

原則として、治療介入から28日後のアウトカムとしたが、入手エビデンス（例、総死亡）によって、例えば28日後のアウトカムの提示がない（または少ない）場合などにおいては、7日、あるいは14日のものも採用した。

表1：本ガイドラインにおける COVID-19 の重症度分類

重症度	酸素飽和度	臨床状態	診療のポイント
軽症	SpO ₂ > 93%	呼吸器症状なし 咳のみ息切れなし	多くが自然軽快するが、急速に病状が進行することがある
中等症	SpO ₂ ≤ 93%	息切れ、肺炎症状 酸素投与が必要	入院の上で慎重に観察
重症		ICUに入室、または人工呼吸器が必要	人工呼吸器管理に基づく重症肺炎の2分類（L型、H型）

※厚生労働省「新型コロナウイルス感染症 COVID-19 診療の手引き」を改変

③GRADE Adolopment（エビデンスの効率的収集）

公開されている複数の Living SR/guidelines をそのまま採用する（adoption）ことはせず適応とした（adaptation）。査読を経ないプレプリントサーバー論文も含んだ。学会抄録やプレスリリースの結果は採用しなかった。Living SR/guidelines において十分なエビデンスの収載がない一部の CQ では、一次研究を独自に検索した。本 ver3.0.0 は2020年12月31日時点で得られたエビデンスを元に作成している。

エビデンス情報源として採用した主要 Living SR/Guidelines は以下の通りである。

- ・ Cochrane France 主導の Living mapping of ongoing research
(https://covid-nma.com/living_data/index.php)
- ・ Australian guidelines for the clinical care of people with COVID-19
(<https://app.magicapp.org/#/guideline/4361>)
- ・ MAGIC Evidence Ecosystem Foundation
(<https://app.magicapp.org/#/org/87/guidelines>)
- ・ Infectious Diseases Society of America Guidelines on the Treatment and Management of Patients with COVID-19
(<https://www.idsociety.org/practice-guideline/covid-19-guideline-treatment-and-management/>)
- ・ WHO Living Guidelines: Therapeutics and COVID-19
(<https://app.magicapp.org/#/guideline/4649>)

④エビデンス総体の確実性の GRADE 評価

④-1：エビデンス総体の確実性の定義と評価方法

GRADE/DECIDE におけるエビデンスの確実性とは、効果が研究所見とは大幅に異なる可能性を評価したものである。本ガイドラインで採用している GRADE アプローチによるエビデンス総体の確実性の定義を表 2 に示す[6, 7]。

表 2：GRADE システムにおけるエビデンス総体の確実性の定義	
高 (A)	真の効果が効果推定値に近いことに大きな確信がある。
中 (B)	効果推定値に対し中等度の確信がある。つまり、真の効果は効果推定値に近いと考えられるが、大きく異なる可能性も否めない。
低 (C)	効果推定値に対する確信性には限界がある。真の効果は効果推定値とは大きく異なるかもしれない。
非常に低 (D)	効果推定値に対し、ほとんど確信が持てない。真の効果は、効果推定値とは大きく異なるものと考えられる。

エビデンス総体の確実性（高[A]、中[B]、低[C]、非常に低[D]）は、GRADE の 8 ドメイン、つまり等級ダウンの 5 ドメイン（Risk of bias [RoB]、非直接性、非一貫性、不精確さ、出版バイアス）、等級アップの 3 ドメイン（大きな効果、用量反応勾配、交絡因子による過小評価：相反バイアス）、をもとに評価した。個別研究およびエビデンス総体の RoB は、ランダム化臨床試験（randomized controlled trial：RCT）については Cochrane RoB 2.0[8]を使用した。非ランダム化研究（non-randomized studies：NRS）については、risk of bias in non-randomised studies of interventions（ROBINS-I）ツール[9] を使用し、Risk-of-bias VISualization（robvis）の Shiny web app [10] を使って RoB テーブルを表示した。

④-2：アウトカム全般における正味の効果推定値の算出（Net Effect Estimate）

本ガイドラインでは3つの重大アウトカムを設定したが、その重要性は等価ではないことが想定される（例えば、死亡アウトカムは臨床症状改善や重篤有害事象アウトカムと比べ、重要性が高いと考えられる）。そこで、利益と害のバランスの評価のために、これらのアウトカムの効果をそれぞれの重要性の違いを加味して統合し、正味の効果推定値（Net Effect Estimate）を算出した [11]。アウトカム全般にわたる正味の効果推定値の算出にあたっては、臨床症状改善アウトカムの効用値を1とし、それを基準に全原因死亡や重篤有害事象アウトカムの効用値をパネル委員会の合議により定め、EBSCO Health DynaMed Plus [12]を用いて計算した（臨床症状改善や重篤有害事象アウトカムの定義が論文によって異なるため、効用値の設定はCQごとに行った）。

算出された正味の効果推定値の大きさと信頼区間をもとに、アウトカム全般についての不精確さを表3の通りに評価した。

表3：Net Effect Estimate の分類と不精確さ（参考文献11より引用）		
分類	点推定値と信頼区間の状態	不精確さ
Net benefit	信頼区間全体が有益	精確さ：高
Likely net benefit	点推定値は有益だが、信頼区間の下限は有害 点推定値の絶対値が信頼区間下限の絶対値より大きい	精確さ：中
Possible net benefit	点推定値は有益だが、信頼区間の下限は有害 点推定値の絶対値が信頼区間下限の絶対値より小さい	精確さ：低
Possibly no net benefit or harm	点推定値は0に近く、信頼区間が広い(*)	精確さ：非常に低
Net benefit or harm likely near zero	点推定値は0に近く、信頼区間が狭い(*)	精確さ：中
Possible net harm	点推定値は有害だが、信頼区間の上限は有益 点推定値の絶対値が信頼区間上限の絶対値より小さい	精確さ：低
Likely net harm	点推定値は有害だが、信頼区間の上限は有益 点推定値の絶対値が信頼区間上限の絶対値より大きい	精確さ：中
Net harm	信頼区間全体が有害	精確さ：高

*幅の広い信頼区間と幅の狭い信頼区間の区別は、最小重要差（minimal important difference: MID）の閾値に基づいて行うことができる[11]。

なお、アウトカム全般にわたる正味の効果推定値の大きさに関する判断閾値は、パネル委員会の合議により表4のように設定した（例：1000人あたり80人の有益効果は「小さな効果」）。

表4：正味の効果推定値（1000人あたりのリスク差）の大きさの判断閾値				
わからない	わずかな効果	小さな効果	中程度の効果	大きな効果
0~10人	11~30人	31~100人	101~200人	201人以上

⑤推奨の策定と合意形成、およびタイムフレーム

⑤-1：推奨の作成と合意形成の方法

GRADEシステムで示される推奨の強さは2種類、方向2種類である、すなわち、強い推奨、弱い推奨、弱い推奨反対、強い推奨反対の4つのカテゴリに分類される。推奨の決定に先立ち、タスクフォース／アドバイザリーボードからなるパネル委員会は、GRADE/DECIDEのEvidence-to-Decisionテーブル[13]を活用し、エビデンスの確実性（高、中、低、非常に低）、利益と不利益のバランス、価値観や意向、コストや資源利用の4つの基本要因、さらに、許容可能性と実行可能性を評価した。最終的な推奨の強さの決定はパネル委員会の合議に基づいたが、基本方針として、アウトカム全般にわたるエビデンス総体の確実性が非常に低い（very low=D）場合には、本疾患の特殊性、ガイドラインの持つ社会的影響力の大きさ、エビデンス集積のスピード感を勘案した結果、拙速にいずれかの推奨方向を明示することを避けることとした。パネル委員会による投票を行い、修正Delphi法（Rand/UCLA）による合意形成を図った。推奨の強さの定義と推奨の強さを決定する主要4基準を表5、表6に示す。

表5：各ガイドライン利用者別の推奨の強さが持つ意味		
	強い推奨（1）	弱い推奨（2）
定義	介入による望ましい効果（利益）が望ましくない効果（害、負担、コスト）を上回る、または下回る確信が強い	介入による望ましい効果（利益）が望ましくない効果（害、負担、コスト）を上回る、または下回る確信が弱い
患者にとって	その状況下にあるほぼ全員が、推奨される行動を希望し、希望しない人はわずかである。	その状況下にある人の多くが、提案される行動を希望するが、希望しない人も多い。
臨床医にとって	ほぼ全員が推奨される行動を受けべきである。	患者によって選択肢が異なることを認識し、各患者が自らの価値観や意向に一致した治療の決断を下せるよう支援しなくてはならない。

表 6：推奨の強さを決定する主要 4 基準		
	強い推奨が正当化される場合	弱い推奨が予想される場合
全体的なエビデンスの確実性	全体的なエビデンスの確実性は、「高」または「中」である。	全体的なエビデンスの確実性は、「低」または「非常に低」である。
利益と害のバランス	利益が明らかに害を上回る、あるいは下回る	利益と害が拮抗している、またはバランスが不確実である
価値観や意向	すべてまたはほとんどすべての患者が同じ選択をする	十分に情報を得た患者の選択肢にはばらつきや不確実性がある
必要資源量やコスト	介入の正味の利益は、すべてあるいはほとんどすべての状況で正当化される（または否定される）。	介入の正味の利益は、ある状況では正当化されない場合がある。

※4 基準全てを満たす場合に強い推奨が正当化される。いずれかを満たさない場合、弱い推奨が予想される。

⑤-2：タイムフレーム

本診療ガイドラインにおけるタイムフレームを補足資料に示す（付録 タイムフレーム参照）。各ステップは、GIN-McMaster ガイドライン作成チェックリスト拡張版（extension of the Guideline Development Checklist for rapid guidelines）[1]に対応している

参考文献

1. Morgan RL, Florez I, Falavigna M, Kowalski S, Akl EA, Thayer KA, Rooney A, Schünemann HJ: Development of rapid guidelines: 3. GIN-McMaster Guideline Development Checklist extension for rapid recommendations. Health research policy and systems 2018, 16(1):63.
2. Schünemann HJ, Wiercioch W, Brozek J, Etzeandia-Ikobaltzeta I, Mustafa RA, Manja V, Brignardello-Petersen R, Neumann I, Falavigna M, Alhazzani W et al: GRADE Evidence to Decision (EtD) frameworks for adoption, adaptation, and de novo development of trustworthy recommendations: GRADE-ADOLOPMENT. Journal of clinical epidemiology 2017, 81:101-110.
3. Fitch K BS, Aguilar MD, Burnand B, LaCalle JR, Lázaro P, van het Loo M, McDonnell J, Vader JP, Kahan JP: The Rand/UCLA Appropriateness Method User's Manual. 2001.
4. 厚生労働省新型コロナウイルス感染症対策推進本部: 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）診療の手引き・第4. 1版. 2020:29-36.

5. Jin X, Pang B, Zhang J, Liu Q, Yang Z, Feng J, Liu X, Zhang L, Wang B, Huang Y et al: Core Outcome Set for Clinical Trials on Coronavirus Disease 2019 (COS-COVID). *Engineering* 2020.
6. 相原守夫: 診療ガイドラインのための GRADE システム [第 3 版]. 中外医学社 2018:313.
7. Holger Schuneman Jb, Gordon Guyatt, Andrew Oxman: GRADE Handbook. 2013.
8. Sterne JAC, Savović J, Page MJ, Elbers RG, Blencowe NS, Boutron I, Cates CJ, Cheng HY, Corbett MS, Eldridge SM et al: RoB 2: a revised tool for assessing risk of bias in randomised trials. *BMJ (Clinical research ed)* 2019, 366:l4898.
9. Sterne JA, Hernán MA, Reeves BC, Savović J, Berkman ND, Viswanathan M, Henry D, Altman DG, Ansari MT, Boutron I et al: ROBINS-I: a tool for assessing risk of bias in non-randomised studies of interventions. *BMJ (Clinical research ed)* 2016, 355:i4919.
10. McGuinness LA, Higgins JPT. Risk-of-bias VISualization (robvis): An R package and Shiny web app for visualizing risk-of-bias assessments. *Res Syn Meth.* 2020; 1- 7. <https://doi.org/10.1002/jrsm.1411>
11. Alper BS, Oettgen P, Kunnamo I, Iorio A, Ansari MT, Murad MH, Meerpohl JJ, Qaseem A, Hultcrantz M, Schünemann HJ et al: Defining certainty of net benefit: a GRADE concept paper. *BMJ Open.* 2019, 9: e027445.
12. EBSCO Health DynaMed Plus. <http://net-effect.wisdmforafib.com>
13. Alonso-Coello P, Oxman AD, Moberg J, Brignardello-Petersen R, Akl EA, Davoli M, Treweek S, Mustafa RA, Vandvik PO, Meerpohl J et al. GRADE Evidence to Decision (EtD) frameworks: a systematic and transparent approach to making well informed healthcare choices. 2: Clinical practice guidelines. *BMJ.* 2016. 353: i20

他のガイドラインの推奨（2021年1月27日現在）

国内の「新型コロナウイルス感染症 COVID-19 診療の手引き 第4版」および「COVID-19 に対する薬物療法の考え方 第6版」はその性質上、治療薬剤に対する推奨を示すものではないため第2.2版からは除外した。また、最新のエビデンスを踏まえて更新されているもののみを取り上げることとし、SSC guidelines on the management of critically ill adults with COVID-19（米国集中治療学会）も第2.2版からは除外した。

1. ファビピラビル

ガイドライン名	IDSA Guidelines on the Treatment and Management of Patients with COVID-19 (米国感染症学会) [1]	Australian guidelines for the clinical care of people with COVID-19 (version 32.1) [2]	COVID-19 Treatment Guidelines (米国国立衛生研究所) [3]	WHO Living Guideline: Therapeutics and COVID-19 (version 3.0) [4]
最終更新日	2021年1月8日	2020年12月24日	2021年1月14日	2020年12月17日
推奨	推奨なし	ランダム化比較試験以外での非投与を推奨(1D)	推奨なし	推奨なし

2. レムデシビル

ガイドライン名	IDSA Guidelines on the Treatment and Management of Patients with COVID-19 (米国感染症学会) [1]	Australian guidelines for the clinical care of people with COVID-19 (version 32.1) [2]	COVID-19 Treatment Guidelines (米国国立衛生研究所) [3]	WHO Living Guideline: Therapeutics and COVID-19 (version 3.0) [4]
最終更新日	2021年1月8日	2020年12月24日	2021年1月14日	2020年12月17日
無症状～軽症	レムデシビル非投与を推奨(2D)	推奨なし	推奨なし	

中等症で酸素なし	レムデシビル非投与を推奨(2D)	推奨なし	推奨なし	入院を要する COVID-19 患者では重症度にかかわらずレムデシビル非投与を推奨(2C)
中等症で酸素あり	レムデシビル 5 日間を推奨(2C)	投与を推奨(2B)	投与を考慮(BII)、酸素投与量が増加している場合はデキサメサゾンとの併用を考慮(BIII)	
高流量酸素を使用する重症(NIV、NHF など)	レムデシビル 5 日間を推奨(2C)	非投与を推奨(1B)	デキサメタゾンに追加して投与を考慮(BIII)	
人工呼吸器、ECMO を使用する重症	レムデシビル投与を推奨(2C)	レムデシビルの投与開始を推奨しない(1B)	挿管されて間もない場合は投与を考慮(CIII)するが、単独投与は勧めない	
コメント	室内気で SpO ₂ <94%となる酸素投与、人工呼吸器または ECMO を使用する患者集団では推奨は 2B	5 日間か 10 日間のどちらがよいかは明らかではない		

3. ハイドロキシクロロキン

ガイドライン名	IDSA Guidelines on the Treatment and Management of Patients with COVID-19 (米国感染症学会) [1]	Australian guidelines for the clinical care of people with COVID-19 (version 32.1) [2]	COVID-19 Treatment Guidelines (米国国立衛生研究所) [3]	WHO Living Guideline: Therapeutics and COVID-19 (version 3.0) [4]
最終更新日	2021 年 1 月 8 日	2020 年 12 月 24 日	2021 年 1 月 14 日	2020 年 12 月 17 日
推奨	全患者で非投与を推奨(1B)	全患者で非投与を推奨(1A)	全患者で非投与を推奨(AI)	全患者で非投与を推奨(1B)

4-1. ステロイド（ステロイドパルス療法を含まない）

ガイドライン名	IDSA Guidelines on the Treatment and Management of Patients with COVID-19（米国感染症学会）[1]	Australian guidelines for the clinical care of people with COVID-19（version 32.1）[2]	COVID-19 Treatment Guidelines（米国国立衛生研究所）[3]	WHO Living Guideline: Therapeutics and COVID-19（version 3.0）[4]
最終更新日	2021年1月8日	2020年12月24日	2021年1月14日	2020年12月17日
無症状～軽症	デキサメタゾン非投与を推奨（2C）	デキサメタゾンのルーチンでの使用を推奨しない（2C）	デキサメタゾン非投与を推奨（AIII）	デキサメタゾン非投与を推奨（2C）
中等症で酸素なし	デキサメタゾン非投与を推奨（2C）	デキサメタゾンのルーチンでの使用を推奨しない（2C）	デキサメタゾン非投与を推奨（AII）	デキサメタゾン非投与を推奨（2C）
中等症で酸素あり	デキサメタゾン投与を推奨（2B）	デキサメタゾン投与を推奨（1B）	酸素投与量が増加している場合はレムデシビルとの併用を考慮（BIII） レムデシビルが使用できない場合 デキサメタゾン単独で投与を推奨（BI）	デキサメタゾン投与を推奨（1B）
高流量酸素を使用する重症（NIV、NHF など）	デキサメタゾン投与を推奨（2B）	デキサメタゾン投与を推奨（1B）	デキサメタゾンの投与を推奨（AI） レムデシビルの併用も推奨（BIII）	デキサメタゾン投与を推奨（1B）
人工呼吸器、ECMO を使用する重症	デキサメタゾン投与を推奨（1B）	デキサメタゾン投与を推奨（1B）	デキサメタゾンの投与を推奨（AI）	デキサメタゾン投与を推奨（1B）
コメント	デキサメタゾンが使用できない場合、メチルプレドニゾン 32mg、	デキサメタゾンが使用できない場合、ヒドロコルチゾン 50mg 6 時間ごと、又はプレドニゾン 50mg/	デキサメタゾンが使用できない場合、プレドニゾン 40mg/日、メチル	

	またはプレドニゾン 40mg の使用を推奨	日で代替可メチルプレドニゾンでもいいが用量はわかっていない	プレドニゾン 32mg/日、ヒドロコルチゾン 160mg/日として投与	
--	-----------------------	-------------------------------	-------------------------------------	--

4-2. ステロイドパルス療法

ガイドライン名	IDSA Guidelines on the Treatment and Management of Patients with COVID-19 (米国感染症学会) [1]	Australian guidelines for the clinical care of people with COVID-19 (version 32.1) [2]	COVID-19 Treatment Guidelines (米国国立衛生研究所) [3]	WHO Living Guideline: Therapeutics and COVID-19 (version 3.0) [4]
最終更新日	2021年1月8日	2020年12月24日	2021年1月14日	2020年12月17日
推奨	推奨なし	推奨なし	推奨なし	推奨なし

5. トシリズマブ

ガイドライン名	IDSA Guidelines on the Treatment and Management of Patients with COVID-19 (米国感染症学会) [1]	Australian guidelines for the clinical care of people with COVID-19 (version 32.1) [2]	COVID-19 Treatment Guidelines (米国国立衛生研究所) [3]	WHO Living Guideline: Therapeutics and COVID-19 (version 3.0) [4]
最終更新日	2021年1月8日	2020年12月24日	2021年1月14日	2020年12月17日
推奨	入院患者でのルーチンでの投与を推奨しない(2C)	ランダム化比較試験以外での非投与を推奨(1B)	臨床試験以外での非投与を推奨(BI)	推奨なし

6. シクレソニド

ガイドライン名	IDSA Guidelines on the Treatment and Management of Patients with COVID-19 (米国感染症学会) [1]	Australian guidelines for the clinical care of people with COVID-19 (version 32.1) [2]	COVID-19 Treatment Guidelines (米国国立衛生研究所) [3]	WHO Living Guideline: Therapeutics and COVID-19 (version 3.0) [4]
最終更新日	2021年1月8日	2020年12月24日	2021年1月14日	2020年12月17日
推奨	推奨なし	推奨なし	推奨なし	推奨なし

7. 抗凝固療法

ガイドライン名	IDSA Guidelines on the Treatment and Management of Patients with COVID-19 (米国感染症学会) [1]	Australian guidelines for the clinical care of people with COVID-19 (version 32.1) [2]	COVID-19 Treatment Guidelines (米国国立衛生研究所) [3]	WHO Living Guideline: Therapeutics and COVID-19 (version 3.0) [4]
最終更新日	2021年1月8日	2020年12月24日	2021年1月14日	2020年12月17日
推奨	記載なし	中等症は予防量、重症は予防量を増量した抗凝固療法実施を推奨 (consensus recommendation)	入院例については抗凝固療法を施行することを推奨する(AIII)	推奨なし
コメント			静脈血栓塞栓症とスクリーニングという項目で記載されている。	

[1]. <https://www.idsociety.org/globalassets/idsa/practice-guidelines/covid-19/treatment/idsa-covid-19-gl-tx-and-mgmt-v3.6.0.pdf>

[2]. <https://app.magicapp.org/#/guideline/4716>

[3]. <https://www.covid19treatmentguidelines.nih.gov/>

[4]. <https://app.magicapp.org/#/guideline/4649>

組織構成

日本版敗血症診療ガイドライン 2020 特別委員会 COVID-19 対策タスクフォース

【タスクフォースリーダー】

山川 一馬	大阪医科大学 救急医学教室
-------	---------------

【タスクフォース副リーダー】

橋本 英樹	東京大学医学部附属病院 感染症内科
-------	-------------------

【タスクフォースメンバー】

寺山 毅郎	防衛医科大学校 精神科学講座
-------	----------------

石原 唯史	順天堂大学医学部附属浦安病院 救急診療科
-------	----------------------

石丸 剛	草加市立病院
------	--------

井村 春樹	洛和会音羽病院
-------	---------

岡野 弘	横浜医療センター 救急総合診療科
------	------------------

成田 知大	静岡県立総合病院 救命救急科
-------	----------------

真弓 卓也	金沢大学大学院医薬保健学総合研究科 循環器内科学研究分野
-------	------------------------------

安田 英人	自治医科大学附属さいたま医療センター 救急科
-------	------------------------

山田 浩平	防衛医科大学校病院 救急部
-------	---------------

山田 博之	京都大学初期診療 救急部
-------	--------------

山元 良	慶應義塾大学医学部 救急医学
------	----------------

【アドバイザーボード】

川崎 達也	静岡県立こども病院 小児集中治療センター
-------	----------------------

志馬 伸朗	広島大学 救急集中治療医学
-------	---------------

土井 研人	東京大学 救急科学教室
-------	-------------

江木 盛時	神戸大学大学院医学研究科 外科系講座 麻酔科学分野 J-SSCG2020 委員長（日本集中治療医学会）
-------	--

小倉 裕司	大阪大学大学院医学系研究科 生体統御医学講座 救急医学 J-SSCG2020 委員長（日本救急医学会）
-------	--

【コアワーキングメンバー（GRADE methodologist）】

相原 守夫	GRADE working group／GIN メンバー 相原内科医院／弘前大学医学部消化器血液内科
-------	---

【担当理事】

西田 修	藤田医科大学 麻酔・侵襲制御医学講座 J-SSCG2020 担当理事（日本集中治療医学会） アドバイザーボード兼任
------	---

田中 裕	順天堂大学医学部附属浦安病院 救急診療科 J-SSCG2020 担当理事（日本救急医学会）
------	--